

満州佐伯村慰霊の旅

今 山 水 男

(会員 本匠村大字堂の間三三六)

(開拓地への思い入れ)

前年九月、県下を襲った集中豪雨により耕地と家屋を一挙に失った因尾村の農民二十一戸は、再起の道を大陸に求め、昭和十九年四月、国策移民として折から建設中の元満州國昌図県宝力鎮の佐伯開拓団に入りました。

しかし、二十年八月の突然の敗戦により、再び生活の基盤を奪われ、生命の危険にもさらされる困難な事態に陥りました。

その中で団長が示した「集団を解散する事なく、現地に留まって事態の好転を待つ」という判断が幸いして、壊滅的な打撃は避けられたとは言うものの、犠牲者が少なくなかったことも事実です。この間の出来事は以前本

誌に書いたとおりです。翌二十一年七月、着の身着のままの姿で、一度は捨てた故郷に、傷心の帰国をいたしました。

それから長い年月が経過し、昭和四十七年、時の田中内閣の手により日中の国交が回復し、やがて中国残留孤児や残留婦人の問題が新聞やテレビでしきりに報じられるようになりました。

いつの日か、元佐伯開拓団の跡地を訪ね、帰国の願いもかなわず犠牲となった金田豊さんをはじめ百十四柱の慰霊を弔いたいと願っていましたが、中国各地に自由に立ち入り日本人犠牲者の慰霊が認められるまでには、なお長い時間が必要でした。

私の家も墓標なき大地に父、姉、弟の三人が永眠しております。耐え難い思いに駆られた私は平成六年の暮れ自力で小さな慰霊碑を建立し、近隣の関係者と共にささやかな慰霊の行事を執り行いました。

ところが、それが幸いしたのかほどなく現地慰霊の旅が実現することとなったのです。

(第一回の現地訪問)

平成九年四月、日中友好協会大分県支部古野大六さん

の世話で、現地昌図県人民政府より訪中歓迎の連絡が入り、さっそく旅行準備に入り、訪問団の団長に北山直之（元先遣隊）、副団長に森脇一郎（元佐伯国民学校校長森脇弁市氏子息）、秘書長に矢野徳弥（元団長矢野武吉氏子息）といった人達を選び、総員二十八人の訪中が決まりました。

一行は七月二十八日、空路大連に飛び、その夜のうちにバスで瀋陽（元奉天）に移動し、翌二十九日早朝バスで現地に入りました。此のときの状況を、当時の報告書から引用して少し紹介します。

○午前七時瀋陽出發、鉄嶺、開原を通り九時二十分昌図到着、県人民政府外事課職員二人が同行することになる。まずなつかしい駅を見に行く。駅舎は元のまま、以前よりは雑然としている。駅前は大きな市街地と化している。

駅から元の開拓道路に入る。道はさらに拡張されて舗装され、両側に楊柳や榆の並木が続いている。今年には干ばつなのか、コウリヤンやトウモロコシの発育がよくない。ところどころにビニールハウスが見られる。駅前から約五〇キロ走って宝力鎮に到着。

本部の近くにいた豆腐屋万貴の長男冬貴喜と出会う。

○ここから宝力鎮政府の鎮長秘書の米さんが同乗、最上、山口開拓団跡を通り、十一時に長嶺子に入りいったん下車、勤労奉仕隊の農場の方に歩いて見る。

開拓道路の西側はすべて水田になっているが、水は少ない。風が強く歩きにくい。長嶺子は以前の十倍ぐらいいきな集落になっている。農民の家はすべて煉瓦造りになり、昔の土塀はすっかり姿を消している。

○再びバスに乗り三合荘、四馬家、竜昇などの集落を見ながら北上、元国民学校の入口近くまで来たところで、表敬訪問の時刻が迫ったので、いったん宝力鎮に引き返す。（中略）

この日の正午、宝力鎮人民政府の宋鎮長を表敬訪問、北山団長が過去のおわびと数日後に迫った香港返還のお祝いを述べると、これを好感してか「過去のことより未来の友好こそが大切」と答え、それより祝宴に入り、幾度も乾杯を繰り返して交歓しました。

このあと急いで開拓地に戻り、まず目標として開拓団本部のあった四果樹屯を訪ねたが、当時の面影は全くなく、かつての小高い丘はすべて削り取られ、そこに小学校が新しく設置されていました。

私たちは出迎えてくれた地元の農民や学童たちに簡単なあいさつを済ませた後、すぐさま国民学校との中間にあった納骨堂跡を探しましたが、学校の建物も取り払われ、一帯はすべて新しく水田に変わり、日本人の遺体が埋められた形跡を示すものは何一つ残されておりません。日本人ならたとえ敵方であつたとしても、なんらかの墓標を残すことでしょう。宗教観の違いとは言え残念なことで、内心の衝撃を隠し得ませんでした。そのうち此の村の長老らしい一人が、水田の中に残る一軒家の裏側の空き地に案内して、ここが日本人の埋葬跡だと教えてくれました。

私たちはここで念願の慰霊を行うこととし、北山団長が「お父さん、お母さん、長い間ひとり香華を捧げる者もなく寂しかったでしょう。一日とて皆さんのことを忘れたことのない長い年月でした。わが国が再び過ちを繰り返すことのないよう、長く歴史の監視者として見守っ

てください」と弔辞を述べ、長い黙祷を捧げました。悲しみが一度に迫り、暫く嗚咽する姿が数多く見られました。

私たちは大きな義務の一つを果たしたと思う反面、此の荒れた場所に、救い難い心残りを感じさせられました。これが後に再度の訪問を決意させた、大きな動機となつたことに間違いありません。

午後三時悲しみを残したまま、開拓地を後にしました。

（第二回の現地訪問）

今年に入り、再度現地を訪問することになり、団長に森脇一郎、副団長に私今山水男と竹下正、事務局に矢野徳弥の皆さんを選び、二十三人の参加が決まりました。

一行は六月三十日空路大連に飛び、翌日鉄道を利用して瀋陽に移動しました。車窓に開ける穀倉地帯の広大な眺めと、その行き届いた耕作に感動させられる四時間三十分の旅でした。

翌七月二日、バスで現地に向け出発、前回と異なり高速道路が長春まで完成、約二時間で昌図街に入り、それから約一時間走って宝力鎮に到着、すぐさま開拓地の東

側の畑作地帯を訪ね、今回の旅行の目玉の一つであった現地農民との交流を行いました。

畑作はかつての乾燥地農法を脱し、地下水による灌漑で集約度の高い野菜の生産団地になっています。ここから西側を眺めると、一帯は佐賀平野、あるいは関東北部平野を思わせる広大な水田地帯になっています。日本人の残した耕地が、此のような形で中国農民に引き継がれていることを知り、なんだか大きな救いを感じさせられました。

午後二時、いったん四果樹まで行き、そこから左折して、前回慰霊の場所を訪ねたが、そこは農家の鬼門に当たるということで、少し離れた水田の中に残る狭い畑に移り慰霊を行うこととしました。ここにも遺骨が埋められています。

私たちは何の墓標もない百十四柱の御霊に対し、河原本匠村長より送られた生花の束を捧げ、日本から持参した香炉に因尾茶入りの線香を供え、遺族を代表して私から弔辞を捧げご冥福を祈りましたが、感極まり中絶することもしばしばでした。この日、故郷の瑞祥寺でも北山直之さんら関係者が集い、法要を営んでくれました。

慰霊をすませた後、四果小学校を訪ね、二百人の生徒達の熱烈な歓迎を受け、最高の感激でした。心ずくしのお茶に旅の疲れも一度になくなった感じです。女の校長夏金老師(先生)とは再会で、四年前の記念写真のファイルを呈上しました。

団長森脇一郎先生の「皆さんに会うためやって来ました。しっかりと勉強して、そして日本に来てください」とのあいさつが訳されたとき、理解した子供たちの拍手と、眼の輝きがいまだに忘れられません。

学校には自転車三台、大きなボール十個、ボールペン二百本などを贈りました。

帰途、人民政府の李春山鎮長を表敬訪問。「此の地方を稲と野菜と畜産の一大生産地としたい。日本の若い農業技術者を連れ、ぜひやって来てほしい」と言う話、農家戸数約一万二千、人口四万三千の指導者の熱意、中国には若い優秀な人材が育っているという印象でした。

(終わりに)

帰国以来、ふと考えたことがあります。四果村・櫻桃村などの開拓地にもはや日本人がいたという遺物は何も残っていない。そうとを考えていたが、拓務省と書いた日

の丸の荷札さえつければ、軍事物資同様の扱いで何でも送れ、そのなかに多数の石臼が含まれていたと記憶しています。そうだとすると石ひとつない土ばかりの大地なので、まだ幾つかが残っているかも知れません。現地に二度も足を運びながらなぜ気づかなかったのでしょうか。次に現地を訪ねることがあれば、これから何十年、何百年の先まで証拠となる、この石の遺物の存在を確かめておきたい。そう強く願っております。



津井峠

津久見市と上浦町との境にある峠。

津井越ともいう。標高一二八メートル。国道

二二七号線が通る。四浦半島のつけ根を越し、津久見湾と佐伯湾の沿岸を結ぶ。道幅が狭く、曲折が多い險路で県

南地方の難所の一つであったが、平成元年（一九八九）一月、津井バイパスが開通したため、解消され

た。

昔は、この峠が津久見・佐伯両湾を結ぶ主な道路になっていた。佐伯の毛利公も参勤交代の時は、一度船で佐伯を出発、上浦の津井でおり、寒風にさらされながら峠を越し、津久見湾内の日代湾の網代から、ふたたび別仕立ての船で豊後水道を上つ

たという。

明治の終りまでは峠に大きな松の木が四、五本あって目印になっていたが、切り倒され、汽車が通るようになってからは峠はさびれ、わずかに四浦に山越えする人や、上浦から日代の医者に通う人が通るだけとなった。

長い間、津久見は袋道にあるといわれてきた。昭和十八年（一九四三）白杵との間に白津道路が開通して車で白杵と結ばれるようになったが、佐伯との間に千怒崎・津井峠が横たわり、車を寄せつけなかった。佐伯からも車は上浦町の津井までで、県南一周駅伝も津久見・佐伯間は汽車に乗るありさま、県南部の発展は道路にかかっているといわれ、県南の白杵・津久見・佐伯三市を結ぶ動脈として、二級国道大分―佐伯線の改良が熱望されていた。

この地元の熱意が実って、昭和二十六年（一九五二）から津久見側と上浦側の両方から工事が始められた。同二十八年五月には県道津久見―上浦線から二級国道大分―佐伯線（大分市―上野村（現弥生町））に昇格、クローズアップされてきた。上浦町側は町の単独事業として、失対事業で工事が進められ、その後工事は県に移管、昭和三十三年度に上浦町津井から峠までの二二〇〇メートルを改良した。

一方、津久見側は当初から白杵土木事務所の手で着工。計画によると、同市千怒から峠まで延長八六九〇メートルでトンネル二〇を持ち、旧道は通らず全部開さく。総工費三億六〇〇〇万円を要し、戦後の県下の道路工事では最大のものといわれた（「上浦町誌」）。